

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	はなえみ学舎 あみこ（児童発達支援）		
○保護者評価実施期間	令和7年 3月 4日		～ 令和7年 3月 15日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	13	(回答者数) 6
○従業者評価実施期間	令和7年 3月 4日		～ 令和7年 3月 15日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	13	(回答者数) 4
○事業所向け自己評価表作成日	令和7年 3月 24日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<p><感覚統合と運動発達支援> 体育館活動やトランポリン、パルーンベッドなどを通じて、感覚統合を促進する活動が充実しています。また、スヌーズレンなどの特別な空間で、視覚・聴覚・触覚を優しく刺激する活動も提供しています。さらに、看護師が常駐しており、子どもたちの体調管理も安心して行える体制が整っています。</p>	<p><感覚統合と運動発達支援> 週1回の体育館活動では、ボール遊びやリレーなどのルールのある集団遊びを取り入れ、自然な形で体力向上を図っています。また、散策や公園での活動を通して、自然な形で感覚統合を促進し、心身のリフレッシュも図っています。</p>	<p><感覚統合と運動発達支援> 運動後は十分なクールダウンの時間を設け、次の活動にスムーズに移行できるよう配慮しています。また、子どもの体調や気持ちに配慮しながら、段階的に活動を進められるよう支援方法の改善を続けています。</p>
2	<p><社会性・コミュニケーション能力の向上> グループ活動を通して、協力や譲り合いの大切さを体験的に学ぶ機会を提供しています。また、友達を褒める、気遣うなどの良い行動が見られた時は具体的に評価し、そのような行動を増やせるよう支援しています。</p>	<p><社会性・コミュニケーション能力の向上> 小グループでの活動を通して、協力や譲り合いの大切さを体験的に学ぶ機会を設けています。また、SST（ソーシャルスキルトレーニング）を通して、基本的な対人スキルを段階的に身につけられるよう支援しています。</p>	<p><社会性・コミュニケーション能力の向上> 他者への関心が高まってきている様子を大切にしながら、適切な関係づくりを支援していくことを目指しています。また、地域の行事への参加を通して、様々な人との関わりの機会を増やしていくことを計画しています。</p>
3	<p><生活習慣の確立と自立支援> 保育士や児童指導員が季節の制作や音楽遊び、絵本の読み聞かせなど、楽しい活動を通して心の成長をサポートしています。また、基本的な生活習慣の確立に向けて、スモールステップでの支援を行っています。</p>	<p><生活習慣の確立と自立支援> 本人のペースを尊重しながら、集団での活動を通して社会性を育てています。また、課題達成時には具体的な褒め言葉で承認し、自己肯定感を高めながら、基本的な生活習慣の定着を図っています。</p>	<p><生活習慣の確立と自立支援> 家庭と施設で一貫した支援方針を共有し、保護者の精神的・時間的余裕を生み出せるよう努めています。また、保護者の悩みに寄り添い、必要に応じて専門機関との連携も提案しています。</p>

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<p><個別支援と集団活動のバランス> 個別支援の時間と集団活動の時間の配分が児童によってばらつきがあり、一貫した支援計画に基づいた時間配分ができていない状況が見られます。また、集団活動時に他児との関わりが苦手な児童への個別的支持が十分でない場面も見られます。特に新規利用児に対する個別支援計画の立案と実行に時間がかかることがあります。</p>	<p><個別支援と集団活動のバランス> 職員の配置状況や施設のスペースの制約により、個別支援と集団活動を同時に実施することが難しい状況があります。また、児童の発達段階や特性に応じた支援プログラムの調整に時間がかかり、効果的な支援の開始が遅れることがあります。新規利用児の受け入れ時のアセスメントと支援計画の立案プロセスが標準化されていないことも要因の一つです。</p>	<p><個別支援と集団活動のバランス> 個別支援と集団活動の時間配分を明確にした支援計画の標準化を進め、児童の特性や発達段階に応じて柔軟に調整できる体制を整備します。また、新規利用児の受け入れ時のアセスメントツールを整備し、早期に適切な支援が開始できるようにします。集団活動時には複数の職員で役割分担を行い、個別的なサポートが必要な児童への対応を充実させます。</p>
2	<p><発達支援プログラムの充実度> 言語訓練や運動機能訓練など、専門的な療育プログラムを実施しているものの、その実施頻度が不定期になりがちです。また、個々の児童の発達段階に応じた教材や活動内容の準備が十分でない場合があります。特に、複数の発達課題を持つ児童に対する総合的な支援プログラムの提供が課題となっています。</p>	<p><発達支援プログラムの充実度> 専門職（言語聴覚士等）の勤務形態により、定期的な療育プログラムの実施が困難な状況があります。また、児童の年齢や発達段階が多様化する中で、適切な教材や活動内容の準備に必要な時間と人員が不足しています。職員の専門性向上のための研修機会も限られていることが要因として挙げられます。</p>	<p><発達支援プログラムの充実度> 専門職との連携を強化し、定期的な療育プログラムの実施体制を整備します。また、発達段階別の教材や活動プログラムのライブラリーを整備し、効率的な支援の準備ができるようにします。職員の専門性向上のための研修機会を増やし、日常的な支援の質の向上を図ります。</p>
3	<p><保護者との連携と情報共有> 保護者との情報共有が日々の連絡帳やメールでの報告が中心となり、支援の具体的な内容や成果が十分に伝わっていない可能性があります。また、保護者からの要望や相談に対する迅速な対応が難しい場面もあります。家庭での療育支援に関する具体的なアドバイスの提供も課題となっています。</p>	<p><保護者との連携と情報共有> 職員の業務量が多く、保護者との十分なコミュニケーション時間が確保できていないことが主な要因です。また、支援内容や成果を分かりやすく伝えるためのツールや方法が確立されていないことも影響しています。保護者支援のための体制や手順が明確化されていないことも課題です。</p>	<p><保護者との連携と情報共有> 定期的な面談機会の確保と、支援内容や成果を視覚的に分かりやすく伝えるための資料作成を行います。また、オンラインツールを活用した情報共有の仕組みを整備し、タイムリーな情報提供と相談対応ができる体制を作ります。保護者向けの療育支援セミナーや勉強会の開催も計画的に実施していきます。</p>